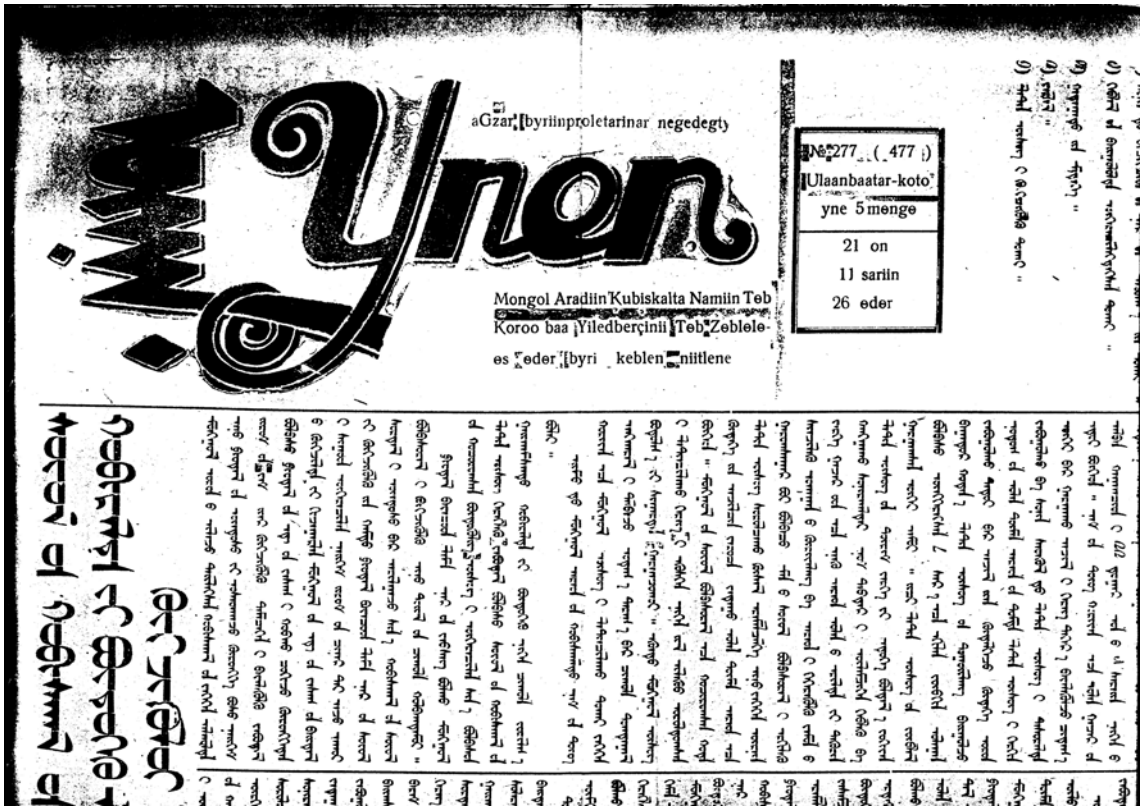
第五章

モンゴル人民共和国の言語政策


Ünen

aGzar byriinproletarinar negedegty

Mongol Aradiin Kubiskalta Namiin Teb Koroo baa Yiledberçinii Teb Zeblele-es eder byri keblen niitlene

№277 (477)

Ulaanbaatar-koto

yne 5 menge

21 on

11 sariin

26 eder

1931 年(共載 21 年)11 月 26 日のウネン紙の表紙。なお、この日のトップの記事は「文化革命の驚くべき変化を創造するラテン文字を発展させよう」であった。

第五章　　モンゴルにおける言語政策

５－１，背景
５－２，ラテン文字化期(1930-1941)
５－３，キリル文字化へ(1941～)

第三章では、モンゴルとの統合を願うブリヤートの知識人たちが敗れ、ブリヤート語が一つの言語として成立した経緯を見てきた。ラテン文字化の途中まではモンゴル語と共同歩調をとることを意識してきたが、結局 1936 年にブリヤート語の文章語の基盤となる方言の変更によりブリヤート語とモンゴル語の距離は大きくなっていった。ここでは、ブリヤートの知識人たちが統合の目標としたモンゴルがどのような言語政策を行ったかに関して検討していくことにしたい。なお、ここでいう「モンゴル」とは、1921 年以降独立するモンゴル、1924 年よりモンゴル人民共和国となり、1990 年代にモンゴル国となった領域をさしている。

すでに第二章で見てきたように、モンゴルにおいては様々な文字によってモンゴル語が書かれてきた。第二章で検討したので文字使用の歴史は省き、ここではまず背景として清朝が支配した時代から、自治時代（1911-1921）をへてモンゴル革命にいたるまでの言語状況を概観することにする。

続いて、ラテン文字化の議論に関して検討していくことにする。ラテン文字化運動は 1930 年に始まるが、少しさかのぼって 1925 年の議論から文字改革に関する議論をみてゆく。

最後にキリル文字化の議論を検討し、モンゴルにおける 1920-1940 年代の文字改革を中心とした言語改革の議論をまとめる。

以上のような手順で検討するつもりである。

５－１，背景

モンゴル革命以前の言語状況

1691 年、現在のモンゴル国に当たる地域は清朝の支配下に入った（内モンゴル地域は 1636 年）。支配下に入ってからも封建領主による支配が維持され、モンゴル語も行政言語として維持された。だが、それと同時に、満州語の教育も始まる。現在のモンゴル国に当たるトシェート・ハーン領、セッツェン・ハーン領、ザサクト・ハーン領、サイン・ノヨン・ハーン領の四領に加え、現在中華人民共和国の内モンゴル領であるホロン・バイルからも生徒たちを集めた官吏養成の学校が建てられたのは 1776 年のことである[Манжийн(1965), 10-11]。

この学校によって養成されたのはモンゴル語、満州語の書記であった。満州語は、清朝の支配者のことばであると同時に、モンゴルにとって 1898 年に至ってもロシアとの外交の言語でもあった[Манжийн(1965), 45]。満州語で残された記録は多く、特に歴史的資料としては重要でありつづけ、1960 年代でも、満州語資料を読むための専門家が大学で養成されている[Загд(1968), 69]。また、この学校はまた、支配階級だけが教育を受けるチャンスが

あったわけではなく、学業に長けた人々が選ばれていたようである。この時期の公文書が集められた『満州圧政時代のモンゴルの学校（1776-1911）』では、成績が悪かった学生が途中で帰されること告げる文書もかなりの数残っている[i]。

時代が下ると、地方にも書記を養成する学校ができはじめる。19 世紀の終わり頃にようやく中国語を学ばせる必要が生じ、満州語や中国語を教える学校が建てられ始めた[Манжийн(1965), 45-46,56-57,65-66]。また同時に、中国語ほどではないものの、外交・交易の言語としてロシア語も重要視されるようになる。1860 年にロシア領事館が建て、1924 まで機能した学校は、通訳を養成する学校であったが、同時にロシア語に通じる官吏の養成にも貢献したという[Шагдар(2000), 53]。

1898 年、中国語の教育を強調する公文書では、モンゴルにおいて中国語の読み書きが「できる」人は２、３人しかいないと書かれていた[Манжийн(1965), 138-139]。但し、この時期の識字は書ける能力の有無が非常に重要な判断材料であったため、叙事詩や歴史書を問題なく読むことができる人々のしばしば「非識字者」と判断されたことはここに留めておくべきであろう。歴史家ボーデンも教育学者のシャグダルも、言語学者リンチンの回想を引いてそのことを述べている[Bawden(1989), 248;Шагдар(2000), 55]。同様に個人教授のような形で、文字教育が成される場合、しばしば、書く訓練がなされなかったため、読むことしかできない人もかなりの数が存在したようである。漢語に関しても科挙制度はないにせよ、官吏として役に立つレベルの識字能力を持つことが識字と非識字を分かつ基準となったと考えられそうである。このような「識字者」の認定方法が変わるのは、モンゴル革命以降のことである。

また、一家族から一人僧侶となるものが生まれることが理想とされたため、仏教寺院内にある教育施設で学ぶ人々もかなりの数が存在した。モンゴルにおける仏教はチベット伝来のものであり、チベット語が重視された。そのため、後に詳しく述べるが、モンゴル革命以降もモンゴル文字での識字者の数より、チベット文字での識字者の数が多かったというデータが存在する。例えば、1927 年のある統計ではモンゴル文字を知る人の数が 10, 120 人であったのに対し、チベット文字を知るものの数は 20, 145 人とほぼ二倍近くいたという[Шагдар(2000), 119]。

1911 年、辛亥革命が起こる。モンゴルでは解放闘争が起こり、自治が獲得される。一時期は現在の内モンゴル自治区のあたりも占領下に修めたが、撤退することになる。この時期、第三章でも登場したブリヤート人ジャムツァラノー（1881-1940）が 1912 年、外務省の文化関係部署に呼ばれ、啓蒙書、教科書の出版などモンゴルにおける公教育の発展に力を発揮するようになる。彼は 1920 年までその職にあり、1921 年のモンゴル革命以降は、内務省の学校部に勤務、1924 年に創設された教育省では顧問として活躍することになる。

また、この時期、ロシア語、中国語の他、英語やフランス語の教育が計画され、実際に 1915-1918 年までイギリス人の教師ウィティックがやってきて教鞭を執っている[Даревская(1994)]。西欧に目を向け、近代化を目標とする教育政策は採ったものの、モンゴル語それ自体の改革が着手されることはなかった。

教育政策全般に関しても、ロシア革命によるロシアの影響の低下とモンゴルの自治取り消しが宣言されることによってそれほど大きな効果を与えることはなかった。

1921 年、新たにスフバートルを中心とした革命家たちがニースレル・フレーに入城、モンゴル革命が成立、1924 年までは活仏ジェプツェンダンバ・ホトクトをその中心に据えていたが、彼の入滅以降、転生しないことを政府が宣言し、社会主義の道へと進んでいく。

ブリヤート人たち

辛亥革命以降、多くのブリヤート人がモンゴルにやってくる。あるものはロシア革命の混乱を逃れ、あるものはモンゴル政府に請われてやってきた。ダムディンジャブの『モンゴルのブリヤート人』には、こうしてやってきたブリヤート人で、経済、文化、学術、技術の各方面で活躍した多くの人々に関して紹介されている[Дамдинжав(2002), 141-191]。教育分野においても活躍したジャムツァラノーの他、エルベク＝ドルジ・リンチノ（1888-1938）、エルデネバトハーン（1888-1937）といった多くの知識人が載せられている。

エルデネバトハーン（エルデネバトハーン・ダシーエフ）は、イルクーツク州出身で、1914 年からモンゴルのロシア学校で教えていた。1921 年 11 月、モンゴルの代表団がレーニンを訪問する際には通訳を務め、1924-1929 年まで教育大臣を務めた人あった。また、1925 年、ゴーリキーにモンゴル文学の発展のために何が必要かを手紙で尋ねた人物としても知られている。

また、初期においては不足していた教師が多くブリヤートから招かれている。その中には例えば、ジャムツァラノーがイルクーツクの師範学校や女子師範学校などから呼び寄せた人の中にはニキータ・バトゥハノフ[ii]、ニコライ・ダニロフ、イノケンティ・トゥルハノフ、アンナ・バンピーロヴァなどがいる[Даревская(1994) 18][iii]。

教育史研究者シャグダルは「1910 年代の初めに我が国に来て、学校を建て、自ら教鞭を執っていたツェベン・ジャムツァラノー、エルデネバトハーン…などは 20 年代, 30 年代我が国の教育省の大臣や顧問として働き、様々なことをなした。我が国の学校の規則、教育プログラム、教科書、教科教育用の参考書などの教育に必要な全ての教材や指導に必要な書類がロシアの例に倣って練り上げられたのである」と記しているが、列挙されたものを準備したのはほとんどブリヤート人たちであった[Шагдар(2000), 136]。1920 年代から 30 年代に掛けて、教育の面で、かなり大きな影響力をブリヤートは持っていたと考えられる。

こうした中で、ブリヤートであったように、モンゴルでもモンゴル語の近代化の議論が話し合われる。

５－２，ラテン文字化期（1930-1941）

大粛清前

1921 年のモンゴル革命以降、モンゴル文字を改良するあるいは廃止すると言った議論は、すぐには聞こえてこない。

1925 年、モンゴル人民革命党第四回大会では、「モンゴル文字を新しく修正し、簡単にすること、多くの人民を教育するのに役立つようにすること…」と文字の改革があるかもしれないことを示唆している[Хувьсгалын(1967) 16]。1925 年のこの時には、ジャムツァラノー、O・ジャミヤン、C・シャグジなどが、モンゴル文字を変えずに、学習を容易にする方法、外来語用文字（ガリク文字）の使用する方法などが話し合われたという[Чулуунбаатар(2000), 92]。教育や言語の近代化関係に大きな影響力を持っていたジャムツァラノーの存在を考えるなら、ワギンダラ文字をもとにしたモンゴル文字の改良を提案した可能性の方が高いように思える。いずれにしてもこの議論は、実行までには至らなかったようである。

なお、ジャムツァラノーが自治時代にも同様の文字改革に関する提案をした可能性も考えられるが、記録として残るものがない。また、イスタンブールでエスペラントを学んだラマ僧ハヤンヒルバー(1885-1937)は 1930 年、ラテン文字化委員会のメンバーであり、ウランウデの言語学会議にも参加していた。彼がエスペラント思想からラテン文字化の思想に何らかの影響を持ち込んだ可能性も考えられるが、このことに関して、今のところ、確証できる資料はない[Doi(1995), 57p; Ринчен(1992)]。

モンゴルにおいてラテン文字に関する議論が、具体的現れるのは 1930 年になってからである。

1930 年、モンゴル人民革命党第８回大会及び、モンゴル人民共和国第６回大会議の出した人民の啓蒙に関しての決定に、はじめてラテン文字化が言及された。党の第８回大会では次のように示されている：

古き教義の残滓の一部であり、新しい文化の発展に不都合なモンゴル文字を取り替えて、文化を広めるのに都合がよく（他国の）大衆に広まっているラテン文字を我々のモンゴル語にあわせて民族の文字として使用する…[Монгол(1967), 11]

また同年 11 月その決定に沿って教育省付属のラテン・モンゴル文字協議会が置かれ、1933 年１月までにラテン文字を国字として機能させるという目標がおかれた。1930 年に出版されたイシドルジのモンゴル文字の教科書『モンゴル語の規則』の前書きには、「間もなくラテン文字に移るからといって、古い（モンゴル）文字の規則は必要ないということにはならない。…」と書かれているが、もうすでにラテン文字とモンゴル文字との対応表が載せられている[Ishidorji(1930), 3]。

ではどのようなアルファベットが採用されたのだろうか。エルベク＝ドルジ・リンチノは 1931 年にあったモスクワでの会議の後に「ハルハ・モンゴルによって提起されたトルコ人の字母(訳注：テュルク・アルファベット)は、後者（ブリヤート・モンゴル）によって採用されなかったし、研究会では言語部門のもとにラテン字母の再審議とモンゴル語への

適応に関する特別委員会が創設された」と記している［リンチノ（1995），48］。また、1931年モスクワであった言語学会議においては「1930 年２月にモンゴル人民共和国からの参加者とともにベルフネウディンスク（現ウランウデ）で行われた会議に基づいて採用された現行のブリヤート・モンゴルのアルファベットとモンゴル人民共和国のアルファベットを再考し、審議した結果、当会議では次のように決定する。…」とブリヤートとモンゴルの二つのアルファベットを別々に並べて書いている。この二つの引用から、1931 年以前のブリヤートとモンゴルのアルファベットが同じでない可能性が高いとおもわれる。しかし、先ほどのイシドルジの教科書に使われているアルファベットは、ポッペの表したものと母音をあらわす文字に若干の違いがあり、一字一音にこだわらなかった面において、バラーディン的なアルファベットと同じ原則が見出せる[Поппе (1933), 99; Ishidorji(1930), 6,10-11]。とするならば、ブリヤート用のアルファベットにはモンゴル用のものにいくつかの文字が加えられていた可能性もある。残念ながらブリヤート学術ｾﾝﾀｰの公文書館に残された 1930 年の正書法会議の資料を見ても、断片的であるため、議論されているアルファベットがモンゴルのためのものであるのか、ブリヤートのものであるのかは判然としないところも多い。なお、この会議にはモンゴル人民共和国からの参加者が二人いたがわかっている。そのうちの一人がハヤンヒルバーであることは判明したが、もう一人は不明である[БНЦ P471/99/26,34]。なお、チョローンバートルはその情報源を明らかにしていないものの「Б．イシドルジ、Б．ドガルジャブといった知識人たちがモンゴル文字を廃し、ブリヤート・モンゴルの経験を使いつつラテン文字を採用すべきであると考えて」と述べている[Чулуунбаатар(2000), 92]。こういった状況から見ると、正書法会議に参加したモンゴル人二人のうちもう一人は、イシドルジかドガルジャブである可能性が高い。

しかし、いずれのアルファベット案も、すでに第三章で述べたように 1931 年の会議では、取り下げられ、ポッペ案が採用される。

すでに何回か名前が挙がっているバダミン・ドガルジャブはこの会議のモンゴル代表として参加したが、実は、1899 年にブリヤートのホリ地方で生まれたブリヤート人であった。1915 年から官吏あるいは教師として働いていた彼がモンゴルに来たのは 1921 年レニングラードで学んでいたときに、モンゴルの革命家スフバートルと出会い、科学アカデミーの前身である典籍委員会で働くよう呼ばれたときからだという。その後彼は 1929 年から 1932 年まで教育大臣を務め、1937 年、財政学校で教師をしていたときに逮捕され 1941 年７月 23 日処刑された[Шагдар(2000), 134]。1931 年、彼はモンゴル教育大臣であったのでモンゴルを代表する資格は十分に有していた。

また、残るイシドルジもブリヤート人であったようである。『モンゴルのブリヤート人』には、バザル・イシドルジエフという名前がのっている。彼はウランウデ近くの貧しい家の生まれで、モンゴル革命で革命を起こそうと、チョイバルサン、スフバートルといった革命家たちがイルクーツクに来たときに彼らを助けた人である。その後、モンゴル風にイシドルジン・バザルと名前を変え（[Шагдар(2000)]ではバザリン・イシドルジ）、1922 年、モスクワでモンゴル人青年代表団とレーニンが会見した時に通訳を務め、その後はウランバートルで教師となり、中学校でモンゴル史、数学、文法、図画工作の授業を教えていた。

モンゴルにおいてイシドルジ先生と呼ばれ讃えられていたのは彼であるという[Дамдинжав(2002), 158]。もし彼がラテン文字化で活躍したイシドルジだとするならば、モンゴルにおける初期のラテン文字化推進論者の中心にいたのはブリヤート人だったということになる。

こういったブリヤート人が中心となって活動していたためか、1931 年６月にブリヤートで文章語のもととなる方言がハルハ方言からセレンゲ方言に変わったためか、それとも、なわばり争いからか、1932 年４月 13 日、科学委員会（後の科学アカデミー）から教育省のラテン文字協議会宛てに、当時科学委員長であったアマルのサイン入りで文書が届く。この文書は、ブリヤート語に適応させて作った正書法をイシドルジが無理にハルハ方言に使っているのは不便であると非難したもので、その代案として科学アカデミーがハルハ方言に近づけた新しい正書法の試案を作成できるようラテン文字協議会からモンゴル人民革命党中央委員会に進言してもらいたいという内容のものであった。これに対して党は、当時行われていた左翼偏向を是正する動きとラテン文字化を絡め、1932 年７月、ラテン文字協議会を解散させ、協議会の行っていた活動は人民教育省の人民教育部が引き継ぐことを発表した[Чулуунбаатар(2000), 93-94]。

さらには 1932 年 11 月 11 日、国家小委員会の代表者と閣僚の合同協議会において、労働者たちの識字活動はモンゴル文字で実行するが、ラテン文字に徐々に移行するための準備を行い、文字を教える基礎となる教科書を早急に出版することを決めた[Цэрэндорж(1976), 28-29][iv]。しかし、計画された文字を教える教科書は出版されなかった。この決定には、アマルの力が非常に大きく関わっていたといわれる[Чулуунбаатар(2000), 94]。彼は 1923 年から 1929 年まで、外務、経済、内務の各大臣や首相を歴任し、1929 年から 1932 年までは科学委員会委員長、1932 年から 1939 年に粛清されるまでは国家小会議議長、首相を歴任する大物であった。

こうして、1932 年から 1940 年までの公文書は全て変わらずモンゴル文字によって残された。しかし、教育の面でラテン文字化は努力目標として細々と続き、この頃の文盲一掃運動で、赤いゲル、赤い部屋といった文化活動拠点において、ウイグル式モンゴル文字を三ヶ月、ラテン文字を一ヶ月教えるコースがあったという記録もあり、また、1933 年の中学校の授業計画にはラテン文字の授業が五年生、六年生、七年生に対し、各週二時間ずつ盛り込まれることが示されている[Санжаасурэн, Жерносек(1981) 48]。識字教育も結局のところあくまでモンゴル文字が中心となっていたようである。

また、逆にモンゴル文字の教育に関する整備が進み、1936 年には、それまで体系的でなかったモンゴル文字の順序が整理され、その順序どおりに整理された辞書が出された。

モンゴルの言語学者チメッグバートルは、新聞などに載った、モンゴル文字支持派、ラテン文字支持派の意見を並べて分析を試みているが、ここでも 1932 年から 1933 年を境にモンゴル文字支持派の意見が多く載るようになっている[Чимэгбаатар(2001), 33-41]。このことからも、この時期に風向きがラテン文字化からモンゴル文字維持へと変わったことがわかる。

こうして、ブリヤートがホリ方言を採用する 1936 年には、第三章でゴインボインが語っ

たうにモンゴルでのラテン文字化運動は下火になっていた［Гомбоин（1936），25］。

大粛清後

1937-1939 年、ソ連でもあった大粛清の嵐は、モンゴルにおいても吹き荒れ、ジャムツァラノーも、エルデネバトハーンも、そして、ラテン文字化を潰したアマルも粛清されていった。とくにブリヤート人はロシア革命を避けてモンゴル国境を越えてきたものが多かったため、白軍側にいたものとしてブリヤート全体に危険分子というレッテルを貼られることが多かった。そのため、かなりの数の人が粛清の犠牲となった[Дамдинжав(2002), 94-110]。

こういった時期、ナショナリストや、それまでの封建主義的な伝統を否定する意味で、ラテン文字が再び見直されることになる。1937 年 10 月の党中央委員会の決定においては、「文化を発展させ、人民に文字を学ばせる状況を作り、５年以内にラテン文字を教えるほか、アラビア数字を使う規則を広める」とラテン文字が再び登場する[Чулуунбаатар(2000), 95]。

その後３年が何も決められずに過ぎていったが、1940 年にはモンゴル人民革命党第十回会議において今後の方針として以下のような決定が出された。

教育の発展と人民に文字を学びやすくするため、ラテン文字を学ばせる活動を組織し５年間でラテン文字を習得させるとともに、アラビア数字を使う規則を広めるべし[Хувьсгалын(1967), 49]

同様の決定は同年に行われた政府の第八回会議にも見える。

1941 年から準備を始め 1944 年には、モンゴル文字を廃し、ラテン文字だけを使う計画という計画が 1940 年７月 26 日に決定され、党書記長であるツェデンバルを委員長とする委員会が作られた。この委員会では、当時教育大臣であったマシライが副委員長を務め、書記にダルハジャブ、その他のメンバーとしてダムディンスレン、ロブサンワンダン、バンザラクチ、ツェベクミド、タムジド、ソルマージャブ、ミンジュール、ドルジスレンなど１７名が参加していた[Чулуунбаатар(2000), 95]。

また、青木富太郎の『蒙古の民族と歴史』によれば、1940 年に発布された憲法の第 92 条に「蒙古人民共和国の紋章は・・赤いリボンの上にラテン文字にてかかれたる蒙古人民共和国なる文字あり」という条項が盛り込まれ, さらに第 93 条では「・・旗の中心に国家紋章あり、その両側に蒙古人民共和国なる文字あり」と国章、国旗の規定が載せられているという［青木富太郎（1941），362］

この時のラテン文字化案は誰の手によるものだったのだろうか、アルファベットの問題が 1931 年モスクワで最終的に決着したときにはポッペ案であることは検討したとおりであるが、1932 年に出版された『ハルハ-モンゴル人の民間口承文芸』の前書きでポッペは、モ

ンゴルで採用されているラテン文字化案に関する批判を述べている[Поппе(1932b), III]とすれば、アルファベットはポッペ案であっても、正書法では違ったものであったのかも知れない。しかし、1937 年頃には、ポッペはブリヤートにおける文字改革のイニシアチブをもはや採っていなかった。この再度のラテン文字化運動とポッペとの関係に関しては、次のキリル文字化のところでまとめて検討してみたい。

1941 年２月 21 年、ソヴィエト地域では次々とラテン文字による民族言語の表記が廃棄された後も、モンゴル人民革命党中央委員会と閣僚審議会の第 17/13 番会議決定の第一項では次のようにラテン文字化の継続をうたっていた。

ラテン文字委員会が計画した 29（1930 年当初計画されたときは 26)文字は我々の（言語の）音声を記録するのに十分かつ適当であるため、変更せずにそのままで定める[Шагдарсүрэн(1992), 128]

しかし、こうして確認されたラテン文字化の方針は、一ヶ月後に取り消されることになる。

５－３，キリル文字化へ(1941～)

1941 年３月 25 日のモンゴル人民革命党中央委員会と閣僚審議会の合同会議第 22/18 番決定で、２月 21 日の決定を無効とすることが宣言され、その第一項でキリル文字化することが決定された。その内容は次の通りである：

モンゴル語をラテン文字化するには、ラテン文字でモンゴル語を表記する記号に不足があり、その出版物の不足などの技術的な問題にも遭遇している。この国の教育の将来の発展は、ただソヴィエト連邦の人民との兄弟関係の強化と、その豊かな文化の習得に向けられるのである。…モンゴル語の文字を新しいロシア文字に移行させることが重要であると考えている。…新しく計画されたモンゴル文字、を許可し全人民と協議して公布すべし。…ロシア文字を基にしたモンゴル語の新文字の最終計画を、皆に発表し、話し合われた意見を人民や政府で決めることをＨ・ツェデンバルを長とする国会委員会に委任すべし[Шагдарсүрэн(1992), 128]

４月 25 日には同合同会議にてキリル文字で教える教師の養成コースを開くことが決定され、５月９日にはアルファベットが 35 文字で構成されることを決定した。

上記の決定により、ツェデンバルを首班とした委員会が設置されるが、そのメンバーにはマシライ（副委員長）、ゴンガルジャブ、ドルジスレン、ロブサンワンダン、ダムディンスレン、ソルマージャブ、ダルハジャブ、ツェベグミド、タムジド、ロブサンドルジという 11 名が参加していた[Дамдинсүрэн(1942), 5]。そのメンバーはラテン文字の採用を推し

た一ヶ月前の陣容とほぼ同じである。

同年 11 月 19 日そのモンゴル新文字中央委員会の会議において、新文字の正書法を作成することについて委員会のメンバーであるダムディンスレンが報告し、この報告に従って、正書法が決定される。1942 年１月、このダムディンスレンの正書法は『新文字の規則』というタイトルで出版された[Дамдинсүрэн(1942), 3]。彼はこの時、30 代半ばであった。

こうして、ラテン文字化への道は完全についえた。不思議なことに正書法が決まる前の 1941 年９月から初頭･中等教育のレベルにおいてもキリル文字によるモンゴル語教育が行われはじめる。しかし、このような方針の転換が急であったため、十分な教科書もなく、方法も確立せぬまま、教育が滞っていた事実を、翌年の 1942 年に小学校に入学したシャグダルは自著のなかで回想している[Шагдар(2000), 140]。こうして決まった正書法も当初の計画では長母音には、母音の上に線を引くものであったが、最終的には母音を二度書くようにするなど若干改訂が加えられ、四年後の 1945 年には「全ての出版、国家公務は 1946 年１月１日より新文字にすべし」と決定されることになる。

1930 年代を通じて、そしてキリル文字化が発表された後でも 1940 年半ばまで、モンゴル文字による出版は存在した。また 1950 年代に至っても、モンゴル文字で教育を受けた世代はモンゴル文字で覚え書きを残していたことを当時東京外国語大学教授であった坂本是忠は観察している［坂本是忠（1959） 211］。また、1915 年生まれの政治家ジャルガルサイハンは 2001 年に出版した回想録の第一章部分を、キリル文字書かれたすぐ後にモンゴル文字でマニュスクリプトの形で載せている[Жаргалсайхан(2001) 17-44]。1990 年代にモンゴル文字に対する再評価がなされたため、モンゴル文字で書けることが誇りにつながったために載せられたもののようである。

いずれにしても、1940 年代に至るまでモンゴル文字の識字運動は成功あまり成功せず、1930 年代半ばまでチベット文字を知る人が、モンゴル文字を知る人よりも多いという状態であった。識字運動の不成功の背景には、西欧式の子音と母音を分けた教育方法を導入しようとしたことにより、教師が混乱し、その教師に教えられた生徒たちもうまく学習できなくなったことが原因であると述べるものもいる[Ганболд(1994)]。理由の如何に関わらず、識字率が伸びなかったことがラテン文字あるいはキリル文字を導入する際にモンゴル文字を非難する理由の一つとなったことは確かである。キリル文字になってから識字運動が本格化し、1950 年代の終わりにはほぼ非識字状態が解消されたといわれる。

キリル文字化よって変わったものと引き継がれたもの

それにしてもキリル文字化の決定は急であったように見える。

しかし、この時期に活躍しはじめていたモンゴルの政治家ジャルガルサイハンは回想録で次のように述べている。長くなるが、この時期の文字の問題に関わるところを引用してみたい。

1940 年、科学アカデミーは文字を改革するという問題についてお上から課題を与えられ、3つの計画を作成した。一つは、モンゴル文字を改革すること、二つ目は、以前使っていたラテン文字に幾つかの変更を加えること、三つ目はロシア文字を適応させるという問題であった。昔はウイグル式文字とかキリル文字という言葉を我々は使っていなかった。文字を改革する問題は何よりもこの国の人々をできるだけ早く識字者にするために学びやすい文字を選ぶという名目で出てきた問題であった。文字の読み書きを知らない人が多くいるのはモンゴル文字が学びにくいことから来ているといった考え方が我々の中に 30 年代から一定の場所を占めていた。

ある人は、他の国と同じで我々も自分たちのモンゴル文字に改良を施すべきだということを否定しなかった。彼らはo、ө、y、γをわける、フランス的な記号あるいは満州文字の点を入れることを考え、外来語にはラテン文字を使うかあるいは、ガリク文字(訳注：外来語をあらわすのに使われる専用の文字)を使おうという意見も出していた。ラテン文字支持者たちは以前使っていたアルファベットに改良を加え、特に二重母音の文字を見苦しくしたという。ロシア文字を新しく導入しようとすることについては、我々の国ではその経験が全くないのでソ連の文字のない少数民族から範を得ようという話があったように思う。何百年もの間文字のあった民族がどうして文字のないところから経験を持ってこようとするのかという話しもあちらこちらで聞こえた。時々、議論が紛糾したのは、文字の美的な観点からの議論であった。例えばбөөрөөрөөという言葉をラテン文字あるいはキリル文字で母音を二回書くとき、文字というよりは犬をつなぐ鎖を思い起こさせるというような批判も時々聞こえたのである。

アカデミーのツェベル氏の指導の下、一年生に入る年齢の子供３人を選び、モンゴル文字、ラテン文字、ロシア文字の三つの文字の三つの授業を同時に初め、ある一定の期間が過ぎた後に試験を受けたところ、彼らは文字を理解し、単語を綴らせたときもみんな同じレベルであった。この結果に基づき、どのような国の、どのような文字であっても、学ぶのに、子供にとって違いはなく、学習の善し悪しは、他の授業と同じでただ個々人の特性や、教育方法に関係するのだということになった。そして、いかなる国においても、文字を知っているものの多さや少なさは文字によるものではなく、学んだか、学ばなかったかということになるという結論が我々のところに届いたのだった。

その時に参加していた文字を改良するための国家委員会のメンバーには科学アカデミーの総裁がいた。この年の終わりにこの委員会の会議にたった一回私は参加しただけで、1941 年春に私が他の仕事に移るまでは、会議は開かれなかった。この一回きりの会議において、私はアカデミーで行われた実験の結果を紹介した。しかし、「単語の最初と真ん中と最後で形が 100 近くある文字を学ばなければならないものと、20-30 文字のものの二つのものが同じであるなんて人が証明できるわけがない」という厳しい反撃にあった。しかし保健省の大臣ゴンボジャブだけが私の結論を支持してくれた。彼はこの委員会のメンバーの中で、知識や専門の面でこの問題に発言する権利のある人であった[Жаргалсайхан(2001), 103-104]

ここで見るとおり、1940 年時点ではラテン文字化を行う計画が主流であったが、キリル文字派も存在したことがわかる。しかし、キリル文字を採用する理由について彼は：

最後の最後になって何故ロシア文字を選んだのかという理由はわからない。この問題は以前から、お上の方で、（あるいは）遠くの方で突然決まったもののようであったのではなかろうか。

[Жаргалсайхан(2001), 104]

と「遠くの方で」という書き方でソ連を臭わせてはいるが、明確な発言は成されていない。

キリル文字に突然代わったことについて第一章でエピソードを紹介したアゼルバイジャンはソヴィエト連邦を構成する共和国であったが、一方のモンゴル人民共和国は独立国であった。とはいえ、ソヴィエトからの政治的圧力は明白に存在したと考えるべきであろう。共和国成立当時からそのような傾向は存在していた。1937 年にはモスクワに呼びつけられた当時の全軍総司令官デミッドがその旅の途中、列車の中で毒殺されるといった例もある。キリル文字化に関しても同様にソヴィエトの圧力のもとでおこなわれたものと考えられる。ソ連邦との「兄弟関係を強めるため」にはキリル文字化が必要だったのである。

さて、ここでこのキリル文字化案とポッペの関係を考えてみたいと思う。この点に関して考察するならば、ここで注目すべきはキリル文字案作成の中心人物となったのはダムディンスレンとポッペの関係である。

キリル文字化の時期までのダムディンスレンの軌跡を辿ると以下のようになる。

彼は 1908 年（一説には 1907 年）ドルノド県マタド村で生まれた。彼の父親であったツェンドはモンゴル語の「寺子屋」的なゲル学校の教師をしていたので、モンゴル語の読み書きを教えたのは、彼であった。また、親戚のバルダンからチベット語を学び、また別のものから満州語を学んでいたという。こうして、家庭で教育を受けた彼は、旗政府の官吏をしていたが、1925 年に軍隊に呼ばれ、そこでも官吏などとして働き始める。1927 年には、ウネン紙の二人いた編集長の一人となった。1931 年春にブリヤートの学術委員会で翻訳作業を手伝ったのが、研究を仕事と知る初めのものだったという。その後、1932 年からは科学委員会で働きはじめた。

そして彼は 1933 年 9 月にレニングラードに赴き、最初は北方諸民族大学で学んでいたが、1934 年から東洋学研究所に移った。1936 年、ソ連国籍のЛ．В．ゼヴィナと結婚。1938 年春から、モンゴルに呼び戻され、大学を卒業せずに帰国した。秋、ジャムツァラノーや「秘密結社」との関係を疑われ逮捕、15 ヶ月拘束された。

1940 年から科学アカデミーに復帰、すぐに 7 月のラテン文字委員会に参加、1941 年にキリル文字化が決定したときは科学アカデミーの研究員であった。

ここで述べたとおりとおり、ダムディンスレンはレニングラードに 1933 年から 1938 年まで住んでいた。同じ時期にはバラーディンやジャムツァラノーもレニングラードに住んでいたが、彼のいた東洋学研究所ではポッペが働いていたのである。

アルパートフは「ポッペとソヴィエトの東洋学者たちとの文通記録」という論文の中で、ポッペがアメリカに移住した後、ソヴィエトの学者たちとやりとりをした記録を紹介している。この論文でアルパートフはダムディンスレンがポッペの弟子だったといい、ダムディンスレン（1986 年死去）が 1984 年頃病気になったことを心配したことが書かれた手紙が残っているのを紹介している[Алпатов(2000b), 53-54]。さらにポッペは「ダムディンスレンの

ような比類なき、才能のある、そして非常に魅力的な人物と仕事ができるというのはついていますね」と手紙に記したり、「ダムディンスレンにお手紙をお書きになるのならどうぞ伝えてください、写真いただきましたと。そして、私の番の時には、自分の写真をおくると。写真の交換です！」と書き残したりしている[Алпатов(2000b), 53]。第三章で見たようなブリヤートの文字改革における彼のバラーディンに対するしつこいまでの批判や、アルパートフが書いたポッペの伝記に見える彼の性格、そして、やはり第三章で見たとおり、非常に冷え切っていたサンジェーエフとの関係とを比較するなら、ダムディンスレンが比較的忠実にポッペの助言あるいは発案に従ってモンゴル語のキリル文字化を行ったことが推測できそうである[Алпатов(1996); Алпатов(2000b) 54; Алпатов(1999)]。

また、さかのぼって 1940 年のラテン文字化に関する委員会の構成を見てみると、ダムディンスレンもメンバーとして入っており、構成メンバー数は少なくなったものの、委員長、副委員長を含めてほぼ全員が、キリル文字化の委員会にスライドしているのがおわかりだろう。文法的な規定ができあがっていたかどうかは明らかでないが、ここから判断するなら、文字は違うものであったかもしれないが、基本方針はほとんど違わなかったと考えて良いのではないかと思われる。また、なにより、正書法が 1941 年 11 月に決まる前に、教師の養成コースが始まり、学校で教えられ始めたことが、それを証明しているように思えるのである。

モンゴル語の文字や正書法はその後、1950 年代の終わりにモンゴル語を見直そうという運動が盛り上がり、1989 年以降は、モンゴル文字に戻そうという意見もあったが現在においてもキリル文字は使用されつづけている。

こうして三地域における言語政策をそれぞれ検討した。

すでにかなりの相関関係も見えてきたと思うが、続く第六章においては、モンゴル、ブリヤート、カルムイク、果ては北京までを渡り歩き、ロシア随一のモンゴル学者と呼ばれる実績を残しながら、キリル文字化の始まりの時期にこの世を去ったウラジーミルツォフの目からモンゴル諸族がどう見えていたのかを検討し、最後にモンゴル諸族にあった変化を考察してみたい。

---

i 例えば[Манжийн(1965), 19]

ii [Даревская(1994)]ではエルデネバトハーンであるとしているがあきらかに間違い

iii 同時期、ブリヤートでも教師の数が不足していたことは第一章でも述べたが、とするとこの記述には矛盾があるように見える。考えられるのは、1920 年代初めにおけるシベリアの政情の不安定さと、モンゴル革命によって、独立した国家が作られたこと、またブリヤートを含めてモンゴルを統合しようと呼びかけた人々がいたことなどが、モンゴルへと人々を誘ったということである。

[iv] ·なお[Чулуунбаатар(2000), 94]によれば、会議は１１月に行われ、ラテン文字は自由選択制という結論になったということになっている